『国際関係学研究』第 46 号（2019 年）19-25 頁（津田塾大学）

多文化共生社会へ向けた在日コリアンとの学生交流企画の試み

斎　藤　敬　太

目次

1.　はじめに
2.　「マルチリンガリズム」の概要
3.　学生交流企画の目的
4.　学生交流企画実施まで
5.　学生交流企画当日
6.　学生交流企画参加者の感想
7.　今後の課題

1.　はじめに

筆者は、津田塾大学において「マルチリンガリズム」という学部生対象の授業を担当している。この授業では日本で暮らす海外にルーツを持つ人々の概要、来日理由、各コミュニティ、彼らの言語環境などの現状や課題などについて扱い、これらを知ることにより多文化共生について考えるきっかけとなることを主な目的としている。しかし、授業で知識を得て考えるだけではなく、やはり当事者と直接交流することが多文化共生につながる異文化理解には重要である。そこで、この授業の履修生の中から希望者を募り、津田塾大学の近隣に位置する朝鮮大学校に在籍する在日コリアンの学生との交流を目的とした「第1回　津田塾大学（マルチリンガリズム）×朝鮮大学校　見学・学生交流企画」（以下「学生交流企画」）を計画・実施した。本稿では、この学生交流企画の概要及び実践報告を行う。

2.　「マルチリンガリズム」の概要

筆者が担当する「マルチリンガリズム」では、日本で暮らしている海外にルーツを持つ様々な人々について、来日理由やコミュニティなどの基本事項を踏まえつつ、主に社会言語学の観点から彼らの言語環境などを紹介している。2018年度は第4タームに開講し、全9回であった。2018年度に実施した授業内容を表1に記す。

各回およそ85～100名が受講しており、最終回の試験受験者数は103名であった。

本稿では各回の授業内容詳細については割愛するが、学生交流企画で協力を得た「在日コリアン」については、第2回のテーマであるオールドカマーとして在日中国人（老華僑）と共に取り上げた。なお、本稿でいう「在日コリアン」という用語であるが、「マルチリンガリズム」では戦前から戦後すぐまでの時期に来日した朝鮮半島出身者及びその子孫を朝鮮籍・韓国籍・日本国籍に関係なく「在日コリアン」として紹介しており、戦後に大韓民国から来日したニューカマーの「在日韓国人」とは区別している。

表1.　2018年度の授業内容

第1回（11/14）	本授業の概説、外国人住民の概要
第2回（11/21）	オールドカマーとニューカマー① ―オールドカマーのコミュニティ―
第3回（11/28）	オールドカマーとニューカマー② ―ニューカマーのコミュニティ―
第4回（12/5）	外国人集住地域と外国人散在地域
第5回（12/12）	外国人住民の言語環境
第6回（12/19）	日系人
第7回（1/9）	ブラジル人集住地域
第8回（1/16）	外国人と方言
第9回（1/30）	まとめ（試験）

3.　学生交流企画の目的

日本国内には様々な国・地域から人々がやって来て暮らしているが、在日コリアンについては、他の集団と比べて日本に古くから暮らしていながらも、あまり実態を知らない学生が少なくない。その理由としては、在日コリアンの団体の一つである在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯）が支持する朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）に関する日本のマスコミの報道などによるイメージなどもあり、彼らの存在を知ったとしても近寄りがたいと考えてしまうということが挙げられる。筆者の周辺にもそのような人が少なからず存在している。

朝鮮民主主義人民共和国が支援する在日コリアンの教育機関として全国に67のウリハッキョ（朝鮮学校）が存在するが、その中で唯一の大学校（日本の大学に相当）が朝鮮大学校である。

朝鮮大学校は1956年創立された。1959年に東京都小平市に校舎を移転し現在に至る。8つの学部、朝鮮文化コース、研究院などがある。

朝鮮大学校は津田塾大学から徒歩圏内にあり、このような条件にありながら交流が限定的であるのは非常に勿体無いことであると考え、今回の学生交流企画を計画するに至った。この企画を通して、身近に存在する在日コリアンと直接交流することにより、異文化理解、エポケー、多文化共生などについて考えてもらうことを目的とした。

4.　学生交流企画実施まで

まず授業では前述の通り第2回の授業で在日コリアンについて紹介する回を設け、ここでは在日コリアンの来日時期や主なコミュニティ、朝鮮学校、言語などを概説した。朝鮮学校については筆者が以前訪問した千葉朝鮮初中級学校の様子を紹介した。

津田塾大学及び朝鮮大学校に企画実施の承諾を得たうえで、「マルチリンガリズム」履修生に第3回の授業から学生交流企画実施のアナウンスを始めた。この企画は授業期間終了後に行われるものであり、また自由参加の企画である旨を伝えたうえで、TsudaNetの「ポートフォリオ」上で参加希望・参加可能日のアンケートを実施した。

最終的には2年生～4年生11名及び保護者1名の参加希望者が集まり、日程も2019年2月2日に決定した。参加希望者には、事前に質問したいことについてメールで送ってもらった。

以下に学生から送られた質問を記す。

〇朝鮮大学校関係

・朝鮮大学校でなにを学んでいますか？
・どんな専攻の学科がありますか？
・（学生は）なぜ朝鮮大学校を進学先に選ばれましたか？
・韓国や朝鮮などの同年代の学生の方々(現地の大学生など)との交流や、交換留学などのシステムはありますか？もしあれば、どのような内容ですか？
・朝鮮大学校で学んだ方で、祖国に帰られる方はどのくらいいらっしゃいますか？
・朝鮮大学校はなんらかの権利を剥奪されていると感じたことはありますか？またそれはどのようなことですか？

〇言語関係

・朝鮮大学校で使われている、または学ばれている朝鮮語は、現在の韓国または朝鮮で使われている言葉に近いですか？近くないのであれば、日本語と朝鮮語が混ざったような言葉ですか？
・みなさんの母語は何ですか？また、第二言語は何ですか？
・朝鮮語が第二言語の場合、どのように朝鮮語を学習してきましたか？（場所、時間（週〇回）、

教えてくれた人）
・第二言語の4技能（listening, speaking, reading, writing）のレベルはほぼ同じでしょうか？それとも差がありますか？
○生活関係
・日本での暮らしで何か苦労していること（偏見・差別など）はありますか？
・韓流好きな子が集まる新大久保についてどう思っていますか？好きですか？
・将来どのような仕事をしたいですか？どのような夢がありますか？
○政治関係
・国際関係の観点から、日朝関係が政治的によくなく、簡単に行き来できない状況ですが、今後どのようにすれば互いの関係が良くなると思いますか？
・日本政府に望むことは何ですか？日本人には？朝鮮政府には？
・拉致問題についてどう思いますか？
・南北統一を望んでいますか？

5.　学生交流企画当日

当日は学生1名と保護者1名が欠席したため実際の参加者は10名だった。
学生交流企画は、次の内容で実施した。

①朝鮮大学校食堂での昼食交流
②朝鮮大学校内の各施設の見学
③両大学の学生同士のフリートーク

異文化交流の一つとして、食を通した交流が挙げられる。今回は、朝鮮大学校食堂で食を共にすることで、まずは学生同士の距離を縮めることを目指した（図1）。実際に、食事中に話を共にした学生同士は、食事後も和やかな雰囲気で話しながら次の見学に進むことができた。

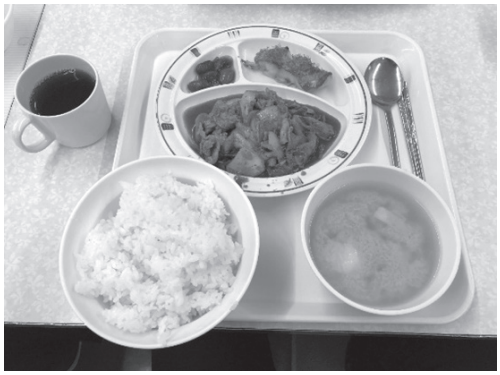

図1.　朝鮮大学校食堂での昼食

見学では、朝鮮大学校の敷地内を巡り、研究棟、図書館、講堂、広開土王碑のレプリカ、鳥類の飼育小屋、売店等を案内してもらった（図2）。

図2.　校内見学の様子

また、校内見学中には、敷地内に見られる言語景観（看板、ポスターなど）に注目させた。前述の通り、「マルチリンガリズム」では社会言語学に関する内容を扱っているため、彼らのような言語環境だからこそ見られる言語使用の現状が音声言語のみならず文字言語にも表れている。授業でも在日コリアンの言語に関連するものとして、朝鮮語の使用や、朝鮮語と日本語の言語接触により生まれた在日コリアン独特の言語について紹介したが、校内の言語景観を実際に目にすることで、彼らの言語環境を実感することができる。

例えば、図3は売店の前に設置されている両替機に書かれた注意書きである。

タイトルが「注意勧告」と日本語（漢字表記）で書かれており、また本文は朝鮮語がベースではあるが「千円札」「両替機」「故障」などの語が漢字表記のまま借用されている。現在の朝鮮語におい

てハングルと漢字を混ぜて書くことはなくなっているが、取り入れている語は日本語そのもの、しかも漢字表記なのである。さらに、“구겨진”（しわくちゃになった）にわざわざ日本語で「（しわくちゃ）」と書き加えるところから、朝鮮語“구겨진”よりも日本語「しわくちゃ」のほうが彼らにはなじみがあるということが窺える。この朝鮮語とも日本語ともいえない「在日コリアンのことば」が、校内の至るところで見られ、言語の変化、言語の多様性について直に感じることができるのである。

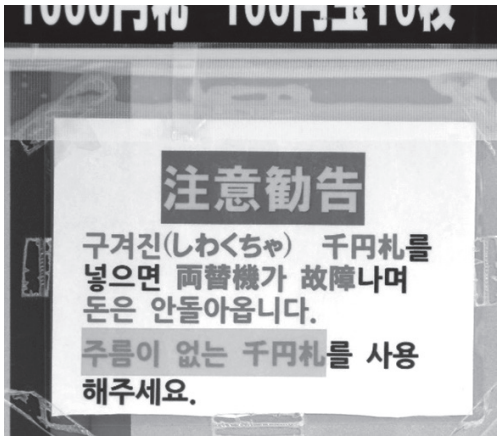

図3.　在日コリアン独特の言語表示

最後に、教室を使用し両校の学生同士のフリートークの時間を設けた（図4）。フリートークでは筆者を含め両校の教員は学生の会話には入らず、自由に話させた。当初は教員も交えての会話も考えていたが、学生同士のほうがより異文化交流に適していると判断し、会話に加わることはしなかった。学生交流企画終了後、学生にはメールで感想を提出させた。

図4.　フリートークの様子

6.　学生交流企画参加者の感想

以下に、参加者がメールで送った感想を、改行等や明らかな誤字脱字のみ修正したほぼ原文で掲載する。感想を見る限り、学生交流企画が参加者の異文化理解にある程度寄与できたと考える。

①みんなとても親しみやすかった。フレンドリーだった。

国籍とか人種とか問わず、フランクに話せて友達として仲良くなれたと思う。

こうして友達が増えていけば戦争とかしない世界になるのになって思えた。私の父が朝鮮に対する偏見がひどくて、そのバイアスが私にもかかったため、その殻を破れた機会として今回この交流企画に参加できて本当によかった。

バイアスをかけてきたのは父だけではなく日本の報道もそうである。確かに、日本側の立場から話すと、日本の行いを正当化させてしまうのは当たり前のことで、どこの国にも当てはまる。自分の国が正しいって言うに決まっている。

でも、日本が行ってきた負の歴史を蔑ろにしてその負の歴史を背負いながら大変な生活を送っている人を看過するのはよくない。

今日は、在日朝鮮人が日本で暮らす上での苦労を知った。

今日行っていなかったら知らなかったであろうことがたくさんあった。勉強せねば。特に歴史を勉強しないといけないと思った。

朝鮮大学校は北朝鮮からの支援がなければ成り立たない。そんな北朝鮮は正恩が独裁体制をしいており、過激な政策により多くの韓国人の両親は反北朝鮮で、朝鮮大学校に通うなと言われている。北朝鮮のおかげで建てられた学校に通う生徒にとって韓国にルーツを持つ人はどっちの立場にたてばいいかわからない。それがつらい。また日本で暮らしていると、日本国籍でないと生活上不利になる。そのために韓国籍、朝鮮籍を捨てなければならない。自身は朝鮮にルーツがあるのになぜ、日本国籍をもたないといけないのか。

アイデンティティってなに？
など彼らの苦悩を知れた。

国籍ってなんでそんなに大事なの？税金のため？

今回私のバイアスをかなり破くことはできた。朝鮮側の立場からの日本に対する意見を聞くこと

もできた。

全体を通して、やはり教育って大事だと思った。事実の切り取り方は人それぞれだからバイアスをかけたものを子供に教えるのではなく、事実fact「ただ起きたこと」をありのままに伝えること、日本側の立場から捉えた見解、相手国側の立場から捉えた見解の両方を伝えるべきであると思う。
歴史勉強し直そう。

②先日はありがとうございました。またこの度はお写真をありがとうございます。

お陰様で、先日は大変楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

博物館を見学できないことを当初は残念に思いました。フリートークの時間が長いのではないかと感じました。

しかし実際には、話す時間が十分あったので、充実した交流ができたのだと思います。途中で席替えをしてもよかったかもしれません。

朝鮮大学の皆さんは、大変素晴らしいホストでした。感謝の思いを伝えていただけたらと思います。

③朝鮮大学校の方と話しているうちに、彼らは私とは持っている知識も視点も異なっていて、新たな考え方を学ぶ素晴らしい機会となりました。今まで、朝鮮半島での事柄について、日本で得た情報をあまり疑いもせずに、それを事実として受け止めていたことに気づくとともに、在日朝鮮人からみた視点は新鮮に感じました。

また、私が生きてきた中で、在日朝鮮人（と公表されている人）と関わる機会はほとんどなく、北朝鮮や在日朝鮮人の問題というものは、身近なようで、どこか遠い感じのする問題のように思っていました。交流する中で、拉致問題などセンシティブな問題への見解や、祖国の北朝鮮への想いを伺い、私としても今までの考え方は間違っているところがあると自覚させられました。中でも印象に残っていることは、在日朝鮮人の方は現在の北朝鮮の出身の方よりも、釜山や済州島の出身の方が多く、そちらの方言による影響が残っているという話です。私の中での在日朝鮮人の定義は間違っていたと認識を改められたことです。

マルチリンガリズムの授業に関連して言えば、日本語と朝鮮語を並行して学習と使用をしているので、日本語と韓国語の区別がつかない時があり、どちらの言語でも不自由を感じる時があると話していました。バイリンガルと聞くと、バイリンガル特有の苦労も理解せぬまま、羨ましいと言ってしまったことがありましたが、複数の言語に囲まれていても習得するのは決して簡単ではないと学びました。

朝鮮大学校の皆さんとの交流を通じ、在日朝鮮人と私の双方の違いを認識する一日となりました。ここで学んだことは忘れずに、これからも勉強に活かして行きたいと思っております。このような機会を設けてくださり、本当にありがとうございました。

④改めまして、朝鮮大学の訪問と学生の皆さんとの交流会、企画してくださりありがとうございました。写真も送ってくださり、ありがとうございます。

朝鮮学校の訪問は初めてでしたが、これまで朝鮮学校出身の在日の知り合いの方々から伺ったりして知っていたこと、これまで知らなかったことなど、さまざまなことを聞いたり見たりしながら、楽しく過ごすことができました。先生の皆さん、生徒の皆さんがとてもフレンドリーで、初めての場所で緊張していましたが、すぐに慣れることができました。また、私たちの質問に親身になって、そして真剣に考えてくださって、生徒の皆さんが考えていること、私たちの考えをお互い共有でき、とても内容の濃い時間を過ごすことができました。

私個人としましては、母が結婚して日本に移住して来た韓国人なので、そういったつながりから生徒の方々とお互いの話ができたことも、とてもいい経験でした。

難しいとは思うのですが、もし、可能であれば、授業の様子なども見れたり、校内や他の施設（博物館など）の見学などできたら、また、交流した学生の皆さんが、今度は津田の校舎に遊びに来て交流会を開いたりできたら、よりいいだろうな、と思いました。お話しした学生の皆さんも津田に遊びに来たいと言ってくださっていたので…

今回の交流会でつながった朝鮮大学の皆さんと、これからも連絡を取り合ったりしながら、交流していけたらと思います。

どうもありがとうございました。

⑤集合写真を添付して頂き、ありがとうございます。

今回、訪問する前は緊張していましたが、朝鮮大学校のみなさんのおかげで、とても楽しく充実した時間になりました。個人的には一緒に食堂で昼食を食べることができたのがよかったです。

また文化祭などで訪れる機会がありましたら、併設の博物館などじっくり見られればと思っています。今回の訪問を通して、なぜ私はこれまで「在日」と呼ばれる方々について考える機会がほとんどなかったのか不思議に感じました。私が「在日朝鮮人」の方についてもっと知りたいと思ったのは最近のことですが、大学に入学する以前、小学校から高校にかけても、朝鮮にルーツを持つ同級生や知人というのは私が知っている人や知らない人も含め、かなり身近に居たのではないかと思います。訪問の後、「エポケー」についてずっと考えていました。多文化、異文化について考えるとき、感情的になるのではなく、なぜ相手はそう思うのか、もっとしっかり歴史を学び、想像力をもって考えていかなければならないのだと思います。

今回の訪問に協力して下さった、朝鮮大学校のみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

斎藤先生、貴重な機会をありがとうございました。

⑥1.「国家」とは何か、ということを考えた

交流会の前半、たくさんの怖い思いや差別経験をしたことを聞き、そのような体験をしながらも朝鮮人であることにプライドを持ち、日本で朝鮮人として生きていこうとしている彼女たちを見て、「なぜ、在日朝鮮人でいることにこだわるのだろう？」「もっと自由に生きていいのでは？」と感じた。だが、話を聞いているうちに、彼女たちは日本に連れてこられた1世の祖父母や日本で育った2世の父母たちの苦労を見て育っているので自分たちだけ好きなことをするという発想は生まれてこないのだ、ということがわかってきた。

2. 在日朝鮮人の人々の生き方・考え方もさまざまであることを学んだ

みふぁさんのお母さんは在日朝鮮人だが、日本の学校教育を受けたということだった。また、みふぃさんはお父さんの仕事の関係で韓国籍に変更したということだった（２人ともこの話を初めて聞いたと言っていた）。２人の話から国籍だけでは判断できない事情があることがわかった。また、「1校区の朝鮮学校に来る生徒の10倍の在日朝鮮人がその地域で生活していると考えられる」という話から、朝鮮国籍を隠して日本人として生きている人の数が多いことを知った。

「朝鮮人であることにプライドを持っている」と言いながらも「自分たちは3世・4世なので北朝鮮に『帰る』ことは考えられない」という発言もあり、日本で生きる朝鮮人の人々の立場の微妙さ（本国の朝鮮人ではないということ）を感じた。

3.「民族」教育の影響の強さを感じた

「母語は何ですか？」と訊くと「日本語です」ということだったので「朝鮮語は第二外国語？」と尋ねると「母語は日本語で母国語が朝鮮語」と言っていた。朝鮮語を第二外国語ではなく「母国語」と表現することに彼女たちの北朝鮮に対する思いが表れていると思った。

日本のメディアが報道する北朝鮮の状況と朝鮮大学校の学生さんが話す北朝鮮の状況に大きな差異があり、なぜこのような違いが生まれるのだろう、と疑問に思った。彼女たちが語る北朝鮮は、町はきれいで、自分たちの乗ったバスに向かって町の人々がみんな手を振ってくれ、在日朝鮮人の人々のことを気に掛けてくれたということだった。また、ピョンヤンでトップレベルの学校で教育実習をしたが、その学校では様々な国の言語を教えていたということだった。

4. 彼女たちが朝鮮の統一、そして日朝国交正常化を願っていることを知った

しかし、日本国内では北朝鮮の人々と韓国の人々の間に交流がないことを知り、驚いた。（みふぁさん、みふぃさんはそれぞれの留学先で韓国人学生と話した、と言っていた。）

5. 日本人（自分も含めて）は在日朝鮮人の人々のおかれている状況について無関心すぎると感じた

朝鮮大学校の学生のみなさんは一人一人がとても真剣に自分たちの国、在日朝鮮人の人々、自分の家族のことを考えていた。日本では在日朝鮮人の人々に対する差別（ヘイトスピーチや就職差別など）が存在する一方で、多くの人々は在日朝鮮人の人々のおかれている状況に無関心でいる。私自身、今回の交流会で自分がどれほど無関心であったか（＝何も知ろうとしていなかった）ということを思い知った。そして、私たちに必要なことは、出自に関係なく、お互いの違いを尊重しつつ一個人として安心して暮らしていける社会を作っていくことだと思った。

今回、このような貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。交流会を

終えた後に感じたことは、自分の無関心さ、そして「国家」や「民族」とは何だろう、という疑問でした。移民に関する問題は世界各地で起きていますが、その原因は「国家」という縛りがあるからではないか？という思いが生まれてきました。経済面ではグローバル化が進み、ボーダレスな状況になっていますが、私たちは未だに「日本人」「アメリカ人」という分類をしています。しかし、その「○○人」という分類の仕方も、人々が国境を越えて移動・生活することが当たり前になっている現在では微妙な概念になってきています（例：海外にルーツを持ち、学校で日本語の指導を必要とする子どもたちの増加）。朝鮮大学校の学生のみなさんが率直にご自身の生活や思いを語ってくれればくれるほど、彼女たちが背負っている「北朝鮮」という国の存在が増し、「国家」とは何か？という思いが強くなっていきました。でも、それは私が「日本人」ということで差別を受けない環境で生活していることが大きいと思います。

この企画を学生に話す際に先生がこの交流会を企画した意図（学生にどんなことを学んでほしいのか）、交流する際に学生に考慮してほしいこと（エポケーについて）を話していただけると、多くの学生が関心を持つのではないかと思います。（個人的には今回の人数がちょうどいいと思いました。）

最後になりますが、私たちを歓迎してくださった朝鮮大学校の哲先生（すみません、名字を忘れてしまいました）、そして学生のみなさんに心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

7.　今後の課題

今回は初めての企画ということもあり、次回以降の企画に向け検討すべき点があった。特にそれらは参加者の感想にも見られた。

まず、歴史博物館及び自然博物館の見学である。これらの施設は校内にあるのだが、当日は見学することができなかったので、次回以降は見学できるように朝鮮大学校側と調整をする。

また、フリートーク中の席替えについても、検討すべき点である。今回は席替えをしなかったため、フリートークの2時間近く同じメンバーで話をしていた。より多くの学生が交流できるように席替え等をする必要があるのかもしれない。

他にも、朝鮮大学校の授業見学をしたいという感想があったが、これについては朝鮮大学校側と調整する必要がある。

さらに、津田塾大学へ朝鮮大学校の学生を招待するという提案もあったが、これは筆者だけでは実現可能か難しいものであり、専任教員との共同で実施する必要があるかもしれない。

すぐにできそうなものからそうでなさそうなものまであったが、いずれも実現できればより深い異文化交流につながると考える。

謝辞

学生交流企画実施にあたり、朝鮮大学校の皆様にはお礼申し上げます。特に、許哲先生には企画段階から当日の手配や誘導まで多くのところでお世話になりました。